

事業完了報告書（墨田区）

調査研究期間等

調査研究期間	委託を受けた日 ～ 令和 7 年 3 月 12 日
調査研究事項	≪委託研究：夜間中学における教育活動充実に係る調査研究≫ I. 教育課程、教育環境整備に関すること ②中学校教育を実施するに必要な、日本語を母語としない方向けの日本語指導の在り方 ・夜間学級で初めて日本語指導を行う教員の日本語指導力養成カリキュラムの作成及び研究 ・日本語習熟度が低い生徒に対する、教科指導の在り方の研究 ・日本語学習にて「個別最適な学び」「協働的な学び」を目指した、I C T 機器を効果的に活用した教材及び指導の研究
調査研究のねらい	①夜間学級で初めて日本語指導を行う教員の日本語指導力の育成 墨田区立文花中学校では外国籍の生徒が全体の 9 割を超え、日本語に困りを抱えた生徒の国籍も幅広くなっている。そのような状況の中、教員の世代交代が進み、夜間学級に初めて配属される教員も増えており、日本語指導の経験がない教員の日本語指導力育成は喫緊の課題となっている。昨今、日本語指導のできる指導者が不足している現状は、全国の夜間中学校が抱えている課題である。 本研究においては、日本語指導力の育成のために、法務省の定める日本語教育の資格を持つ教員を中心に、校内研修・O J T の仕組みを整理し、初めて日本語指導を行う教員の指導力のスキルアップを計画的に、そして組織的に行う方法を研究する。 ②日本語習熟度が低い生徒に対する、教科指導の在り方の研究 日本語学級で日本語教育を受けた生徒は、普通学級にて義務教育の教科指導を受けるが、教科書を理解するための十分な日本語能力（学習言語能力）は習得に 5 年以上必要だと言われている。そのため日本語学級で 1 年程度の日本語学習を終えた生徒に、教科指導を十分に行うためには、日本語に配慮したカリキュラムの作成が必要不可欠である。この現状は日本語を母語としない生徒が増え続けている全国の夜間中学校にとって、共通の深刻な課題

	である。本研究により、特別の教育課程による学習言語能力が不十分な生徒のための効果的なカリキュラムを模索し、効果的な授業を行うための教材開発・指導方法の研究を行う。 ③日本語学習にて「個別最適な学び」「協働的な学び」を取り入れたＩＣＴ機器の活用 文部科学省は、令和２年度より実施されている新学習指導要領を踏まえ学習者用デジタル教科書の普及を目指しているが、特別の教育課程による授業を実施している夜間学級においては学習者用デジタル教科書をそのまま使用することは難しい状況にある。また、日本語においてはデジタル教科書どころか、指定された教科書もない。その状況の中で、夜間学級の特別な教育課程に対応したデジタル教材の作成は現場の教員に委ねられているのが現状である。本研究においては、全国の夜間中学校に先駆け日本語学習に必要なデジタル教材の作成、及びそのために必要な研究を行う。 日本語指導におけるデジタル教材の活用は、教員の指導力や教材開発と繋がるため必要不可欠なものとなっている。ＧＩＧＡスクール構想を念頭に「個別最適な学び」と「協働的な学び」を往復した授業デザインを行うための、ＩＣＴ機器の活用を研究する。
調査研究の成果	①夜間学級で初めて日本語指導を行う教員の日本語指導力の育成 初級日本語文法において、特に重要と思われる項目を日本語文法指導用の養成テキストとして作成し、日本語指導経験の無い教員を対象とした研修を４月、７月、８月に実施した。模擬授業を混ぜつつ説明する形式を取ることで、日本語指導の理解を深めることができた。 夏季休業中に指導教員と指導経験の無い教員同士による、相互模擬授業を採り入れた約２時間の研修を合計９回実施した。模擬授業の協議内で文法事項等の解説も行うことで、生徒の日本語習得状況に応じた授業について深い理解に繋げることができた。前期に行った授業の振り返りにもなり、授業改善に繋げることができた。 日本語指導力育成の取り組みを日本語指導力育成カリキュラムとしてまとめ、１２月６日に行われた全国夜間中学校研究大会にて、「夜間学級で初めて日本語指導を行う教員の指導力育成」を発表した。 ②日本語習熟度が低い生徒に対する、教科指導の在り方の研究

教科の学習を理解するための日本語能力が不十分な生徒を対象とした、ＩＣＴ教材の作成を行った。数学の授業における従来の紙教材とその解答・解説をＰＤＦファイルとしてロイロノートの資料箱に保存することで、一人１台端末で使用できるようにした。生徒一人一人が別々の課題に取り組む中、教員用端末を利用して解説することで、同一授業内において個別に視覚的にわかりやすい指導を行うことができた。

国語では教科書を使用した時に起こる、文学的文章を扱う際などに生じる文章の内容が生徒の発達段階と合わない問題を解決するために、「レベル別多読ライブラリー」を使用した多読授業を週１回４０分行う授業を取り入れた。回を重ねる毎に内容を推察して話の流れを捉え、最後まで物語を読み通す力を生徒が身につける様子が見られた。読書後に「ロイロノート・スクール」のアンケート機能を使ってアンケートを行った結果、生徒は読書活動を肯定的に捉えることができ、読書を通じて漢字の習得を実感している様子も見られた。

③日本語学習にて「個別最適な学び」「協働的な学び」を取り入れたＩＣＴ機器の活用

ＩＣＴ機器を活用した「個別最適な学び」「協働的な学び」を行うための授業開発に向けた研修を、放送大学客員教授を講師として招聘し、ロイロノート活用のための実技研修を年間４回実施した。

ＩＣＴ機器を活用することで日本語指導において、本校で使用している日本語指導用テキスト「大地」のデジタル化に取り組んだ。その際「個別最適な学び」を充実させるため英語や中国語などの複数の言語に翻訳した文型説明を加え、きめ細かい指導ができるようにした。また、会話練習時において、教室に設置された電子黒板にて掲示する時、日本語のみで理解することが難しい生徒に対し、英語や中国語など複数の言語翻訳表示を追加し翻訳を読ませることで「協働的な学び」における生徒のつまづきを未然に解消した指導ができるようになった。

またカタカナ指導時期にＩＣＴを活用し、学習者が母語音韻と日本語音韻の相違・対応を認識できるように支援した。iPadアプリケーション「カタカナ」を用いて五十音カタカナの音韻を習得後、マイクロソフトWordの読み上げ機能を用いて、個別に与えられた課題の標準的発声を習得と発音の矯正に取り組んだ。

ＩＣＴ機器を活用した個々の支援を行った後、「協働的な学び」として生徒同士の日本語によるコミュニケーションを授業に取り入れた。１２月２３日、２４日に日本語によるスピーチ大会を

	開催し、全生徒が個々に興味を感じた内容を調べた後、調べたことをまとめて日本語で発表することで、日本語の理解をより深めることに繋がった。またそれを聞いた他の生徒がスピーチの感想を日本語にてまとめることで、日本語を通して共感する活動を行うことができた。 さらに教科の授業内で日本語の支援を行いつつ「協働的な学び」を実施するため、数学では授業中に生徒一人一人の課題の解き方を共有させ、自身の解き方と比較し見直すことで間違いに気づかせ、正しい解法を理解させることができた。この取り組みは12月6日に行われた全国夜間中学校研究大会にて「数学科「ICTの活用について」」と題して発表した。
--	--